

目次

『風』『談論風発』	2006
	～
	2007
	より
	—

- つくられた「現実」、虚像としての民営化 1
- 軽すぎる「検閲」と図書館員の権力 23
- 指定管理者制度という後ろ向き選択 —— 北九州市立図書館の実状を見る —— 29
- 図書館員にとって実務とは何か 59
- 『2005年の図書館像』と『これからの図書館像』 65
- レファレンスサービスの一面 78
- 「高齢者サービス」で論議されなかったこと 84
- 小さな村や町の図書館のこれから 89
- 図書館に活気とふれあいの雰囲気をもたらすもの 96
- 活気のある図書館サービスと職員の果たす役割 —— 民営化の何が問題か —— 101
- 流行の平凡さ、流行に関わらないことの新鮮さ 114
- 那賀川図書館のいま 119
- 行革の流れのなかで —— 岡山市立図書館についての「事業仕分け」 —— 124
- 学生は「朝の読書」をどう評価しているか 141

iii 目次

不適切な統計の一人歩き	147
『これからの図書館像』をどう読んだか	
時流の中の古くて新しい問題	165
書店に見るプロとしての要件	170
忌憚のない議論が図書館を発展させる	175
あとがき	180